



W.A. Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第33号



里の家とモーツァルト

モーツァルトへの手紙 (その9)

会員番号 K.618 加藤 明

モーツァルトよ、貴兄が特別であるのはどういうことかがようやく判った気がしたのです。

それは、実は貴兄の音楽は特別にならないというパラドクスに尽きる、ということなのです。

この世の誰にも嫌がられず、エゴイスティックで過剰な反応をさらりといなし、世界のさまざまな生活のときどきに適う、という魔法の音楽なのだから。

そのことが、実証されたような素敵なミニコンサートを体験することができました。

今年三回目となる『雄和華の里 秋フェスタ』(去年は「寄り道フェス」というタイトル)が「ダリア園」で知られている《雄和華の里エリア》で開催されました。

この『雄和華の里 秋フェスタ』に、これも三回目となるが、私の主宰する『モーツァルト広場』で常連となっている四人のマエストロがモーツァルトを演奏する企画があり、私がしゃしゃり出てプレゼンター役としてお話しをすることになっていました。

今回も『雄和華の里 秋フェスタ』を主催する『道草教養大学』の代表鎌田展禎さんからの熱心な依頼があったのです。

雄和地域を活性化しよう、という彼の高邁な考えにほだされて、コンサートのプログラミングから出演者の依頼などを受け持ってきたのでした。

前の二回はレストラン《ヴィラフローラ》での開催だったが、今回は初めてであるが「国の

登録有形文化財」にもなっている萱葺き屋根の『雄和里の家』で開かれました。

当日の12日は幸いにも秋晴れに恵まれ、このうえない絶好のシチュエーションとなり、入場無料ということもあり、期待通り小学生からお年寄りまで幅広いリスナーが所狭しと押し寄せたのです。

音楽、とりわけモーツァルトを愉しむ風情として、これほど絵になる景色はそうザラにあるものではありませんまい。

雄物川沿いの快い秋風そよぐこの『雄和里の家』が、モーツァルトの気を受けて甦る様に、私のみならず多くの視聴者が未体験の感動にこころ躍らせたに違いないのですから。

一時間構成のプログラムは、中間に吉田妃呂子女史の清らかなボーカルで「天空の城ラピュタ」から「君をのせて」と「アナと雪の女王」から「Let it go」というポピュラーな曲を取り



入れて演奏しました。

その2曲をオープニングの『アヴェ・ヴェルム・コルプス』に続いて披露した『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』と『フルート四重奏曲 K285』が挟むかたちで演奏する、というものでした。

すべて、フルート（と独唱）・ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロのフルート四重奏曲に合わせた編成での演奏だったが、それぞれのマエストロが自ら愉しんで伸び伸びと演奏している姿に、大勢の視聴者も心を解き放ち、めったに聴く機会のないナマの演奏に我を忘れて楽しんでいる様子でした。

そして、エンディングテーマとして、『モーツァルト広場』恒例のリート『春への憧れ』をその場に居合わせた全員で合唱して、和気藹々のうちに閉幕。

こんな具合でしたから、どうやら、主催者の期待に応えられたようで、こちらも安堵感にひたることができて、ほんとうに嬉しかった。

その場に居合わせた大勢の満足気な笑顔が今でも忘れられません。

それにしても、フルートの吉田妃呂子さんにはその技巧もさることながら、自ら音楽を愉しむ精神の豊かさの点で、率直に脱帽してしまいました。

前述の2曲の歌唱は、そちらのプロではないだけに多少心配もしたのですが、全体の流れを損なうことなく、視聴者のこころを掴み、一体感を醸成することに成功していました。

恥ずかしながら、知らなかったのは私一人なのかと思わせるほど、みなさんが懐かしそうに頷きながら吉田妃呂子さんの美声を受け容れていたのですから。

取りの一曲「フルート四重奏曲 K285」でも、ロココの優美さを称えた実に聴き応えのあるフルートで、モーツァルト降臨を想わせるものでした。

チェロの大御所藤原ケイ子さんはじめ、ヴァイオリンの預幡さち子さん、ヴィオラの羽川涼子さんとの息もピッタリで、みなさんがモーツァルトを奏でる喜びを素直に語り合い、紡ぎ

あっているように映ったものです。

ところで、この『雄和里の家』での『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』を舞台裏の縁側に足を伸ばしながら聴いていたら、突如としてある想念が脳裡に浮かび、自らを驚かせたのでした。

その想念とは、「この名曲は1786年の夏、モーツァルトの父レオポルトが亡くなって間もない時期に書かれている。そうだ、この遍く知れわたる天空の曲はモーツァルトが亡き父への献上（鎮魂ではない）の音楽なのではないか？」といった確信的な想いでした。

なぜなら、生前父からモーツァルトは「音楽はそれを聴くものに優しくて判りやすいものでなければならない」（もちろん迎合することとは違いますが）という基本姿勢を徹底的に知育されてきたのですが、その深い哀しみを封じながらも、父から受けた指導の集大成として亡父に献上して書かれたもの、という仮説は必然性を帯びつつすっきり成り立つと思われたからに他なりません。

少なくとも、この曲がどういう動機に基づいて書かれたかについて、数多の研究者が多くの時間を割いているにも拘らず、未だに判然としないのですから、私の想念が的を射ていない、とは言いがたいのです。

いやいや、こうした奇異な発見(!)に捉われるほど、このフルートカルテットによる『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』が、モーツァルトを愉しむカタチとしても特筆に価するほど素敵なものであった、ということでしょう。

今回のミニコンサートが一人でも多くのモーツァルトファンを育成する機会になれたなら、それ以上の喜びはないと、主催者の鎌田展禎さんと四人の美しきマエストロに感謝しつつ反芻しているところです。

そうだ、一つだけ、あの日皆さんにお知らせするのを忘れていました。

「《道の駅てんのう》に来れば、いつでもモーツァルトが聴けますよ！」(笑)。

(注) このコンサートは2014年10月12日(日)に開かれました。

パッサウとモーツァルト

会員番号 K.203 松田至弘

ドイツのパッサウ市は、実に美しく魅力にあふれた町である。バイエルン州の東方に位置し、ドナウ川とイン川、イルツ川が合流する地点にある。

ドナウ川の左岸、オーバーハウス城（パッサウの領主司教の城砦であった）が建つ高台から眺めると、町は水上に浮かんでいるように見え、極めて特徴的な景観で一度見たら決して忘れられない。

宗教・文化・経済などの歴史の足跡を色濃く残しており、1952年からはヨーロピアン・ウィーク・フェスティバル（音楽祭）も開催されて有名である。



パッサウの景観〔写真は『パッサウー水上に浮かぶ町』（パサヴィア出版社）による〕

そのパッサウ市と秋田市は、1984年に姉妹都市提携を結んでいる。そして、秋田日独協会は、パッサウ市民との交流を国際交流の中核に据えており、年々友好の絆を強めている。

思い出してみると、私がパッサウ市訪問団に加わり、最初にこの町を訪れたのは2006年のことであった。この年はちょうど、モーツァルト生誕250年の祝年に当たっており、パッサウ日独協会の皆さんは晩餐会の際に、モーツァルト

の「ウィーン旅行」に関する寸劇（通訳つき）を披露してくれた。

モーツァルト一家（父・母・姉同行）が馬車でザルツブルクを出発してパッサウの町に到着し、子供のヴォルフガング・モーツァルトが領主司教の前で演奏し、船でドナウ川を下ってウィーンに行き、女帝マリア・テレジアの前で御前演奏を成し遂げるというストーリーであった。歌をまじえたコミカルな劇で、終始爆笑を誘った。

その当時私は、モーツァルトの生涯とその時代についていろいろ研究していたので、モーツァルトの父レオポルトがリンツからザルツブルクの家主ヨハン・ローレンツ・ハーゲナウアーに出した手紙に、パッサウのモーツァルトのことが記されていることを覚えていた。

モーツァルト一家はパッサウに6日間宿泊した。そして、6歳の人なつっこい神童ヴォルフガングは役人たちとも親しくなり、また、所望されて領主司教のヨーゼフ・マリア・トゥン＝ホーエンシュタイン伯の前で演奏し、謝礼金を得たのであった。

モーツァルトのプロとしての演奏活動の始まりであるが、パッサウの人々はこの歴史的事実をよく理解していて、モーツァルトの人と音楽を大切にしているのである。

ところで、今年（2014年）は、姉妹都市提携30周年に当たっている。パッサウ市から副市長のエーリカ・トレーガー氏や日独協会会長ズィビーレ・ラウシャー氏を初めとする訪問団25人が、10月23日から26日まで秋田市を訪れ、盛大に記念行事が行われた。

秋田市主催の記念式典・祝賀会を終了した次の日、秋田日独協会では訪問団を招いて千秋公

園内のレストラン「千秋亭」で歓迎晩餐会を行い、交流と友好を深めた。

その際、パッサウ独日協会から額に入ったパッサウの景観写生画とドナウ川沿岸の桜の花を写した一枚の大きなラミネート写真（A3サイズ）を、会長個人からモーツァルトの曲を収めたCDをプレゼントされた。CDは、私が以前贈呈した拙著『モーツァルトー時代の窮兇への旅ー』（冬至書房）を読んで、研究の参考になればと考え持参してくれたのだという。

CDの題名は、「モーツァルトーパッサウの大聖堂から」であった。指揮者はヨーゼフ・ヴェルンドル楽長（教授）で、4人のゲストのソリスト（独唱者）とパッサウ大聖堂合唱団、同オルガニスト及びオーケストラによる演奏を記録したものであった。

収録されていた曲は、「戴冠式ミサ」（K.317）を中心に、「エクスルターテ・ユビラーテ」（K.165）、「教会ソナタハ長調」（K.329）、「アヴェ・ヴェルム・コルプス」（K.618）、「自動オルガンのための幻想曲」（K.608）などであった。

これらの曲が演奏されたパッサウ大聖堂とは、正確に言うと聖シュテファン大聖堂のことである。この名称が出てくるとすぐ、ウィーンのそれを思い浮かべることになるが、実はパッサウの方が本山である。旧市街の一番高いところに立つ後期ゴシック及びバロック様式の美しい建物で、世界で一番大きいと言われている教会パイプオルガンがある。

姉妹都市提携25周年（2009年）の時、私は秋田日独協会の訪問団々長として二度目のパッサウ訪問をしたが、その際、記念行事の一環としてこの大聖堂のミサに出席させていただき、二階でのコンサートですばらしい演奏を聴いた。

パイプオルガンとトランペットの合奏に強く心を打たれ、またヴィドール作曲「オルガン交響曲第5番」の演奏を聴き、5つのオルガンの荘厳な響きに圧倒されたのだった。



パッサウ聖シュテファン大聖堂の
パイプオルガン

このような経緯があり、私は感謝しながら、なつかしい思いでこの教会音楽のCDを聴いた。

収録曲の中で、「アヴェ・ヴェルム・コルプス」は、一般に最もよく知られている。私の大好きな曲でもあり、パッサウの合唱団の歌声を聴けて大変うれしく感じた。

「戴冠式ミサ」は、モーツァルトがザルツブルク宮廷及び大聖堂のオルガニストの職にあった時、ヒエロニムス・コロレド大司教の命を受けて作った曲である。モーツァルトは大司教を心底嫌っていたが、教会音楽の作曲には衷心から意欲的だったのであり、工夫を凝らして完成させたのである。聴いてみて、親しみと統一性と緊迫感があり、神学的に細かく配慮された曲であることがわかった。カトリックの神学者ハンス・キュングもプロテスタントの神学者カール・バルトもこの作品を好み、高く評価している。

「自動オルガンのための幻想曲」は、初めて聴いた曲であった。モーツァルトは、時計仕掛けのからくりで動くオルガンでの演奏を考えていたと言われるが、今日では、パイプオルガンか二台のピアノで演奏されることが多いという。

大聖堂オルガニストのハンス・ライトナー氏がパイプオルガンを弾いているが、美しく不思議な音色が響き渡り、大変感動的である。

十 月 賦

会員番号 K.427 鎌田展禎

10月12日：雄和華の里秋フェスタ

「雄和華の里エリア」に三年目の『アヴェ・ヴェルム・コルプス』がたゆたう。

同エリアが誇る「秋田国際ダリア園」——、その見頃に開催する恒例の秋季イベントは、『K618』を開演の合図とする「モーツァルト広場」を迎えること早三度となった。

レギュラー・コンサートの“約束事”が我が住むまちへ運び込まれる喜びにしみじみと浸る——。

空は秋晴れ。

会場に選んだエリア内の茅葺き古民家「里の家」（国指定有形文化財）は、聴衆が縁先に立ち並ぶほどの盛況を呈した。

過去二回はエリア最上部を占める観光交流館「Villa・フローラ」の円形ホールにおいて実施した「丘の上の音楽会」を、今年は“畳の上”へ趣を転じた和洋折衷の試みである。

馬屋片中門造りの家屋に馴染んだ加藤明代表のもてなしと、出演者である吉田妃呂子さん（フルート）・預幡さちこさん（ヴァイオリン）・羽川涼子さん（ヴィオラ）・藤原ケイ子さん（チェロ）の技巧と心ばえの作用により、会するひとびとは解け合い、得も言われぬ雰囲気共有した。

主催側の要望が叶い、ヴォーカルを吉田さんが受け持つことで、映画『アナと雪の女王』から流行りの挿入曲『Let It Go』が実演されたのは貴重な特典であろう。

また、ジャズ分野の造詣も深い加藤代表が、

サクソ奏者としての活動経歴を有する運営スタッフ・佐々木広忠さんとのビル・エヴァンス評に興じる中、事実誤認の指摘を受けた一幕もけだし珍事である。

10月19日：国民文化祭

加藤代表と連れ立ち、「第29回国民文化祭・あきた2014」の一環事業である「オーケストラの祭典」を、秋田県民会館大ホールの最上階で鑑賞する。

第2部のステージで演奏されたグスタフ・マーラー作曲の『交響曲第1番ニ長調—巨人—』に没我する加藤代表の姿が印象深い。

帰途は名残惜しい気持ちを抑え、風邪をうつさぬように解散する。

道中同乗した加藤代表の六一八号には常備盤ではなかったはずの“ビル・エヴァンス”が積み込まれていた。

10月26日：佐々木家・齊藤家結婚披露宴

「雄和華の里秋フェスタ」に二人三脚で貢献した佐々木広忠さんと齊藤真由美さんの結婚披露宴に臨席する。

新郎は大規模耕作で知られる旧雄和町左手子（さてこ）郷の開拓民・佐々木広忠から十数代目に当たる農事後継者であり、始祖の名を贈った周囲の思いは大きい——。

新郎が同業同好の友人であり、義父の家系が左手子佐々木家にゆかりのあることから、祝辞・余興・エスコートの要務を兼任する。

重圧から脱した酒席のたけなわで杯をあおると、二週間前の新郎と加藤代表の掛け合いがよみがえり、それをきっかけに、陶然とした脳裏はここしばらくの情景を連想的に任意再生し続けた――。



以上は10月から三つの日曜日を切り取った隔週記録であるが、改めて加藤代表との行き来が繁くなったことを実感する。筆はともすれば仔細や前後の出来事を追いたがるも、紙面の都合を案じ、散文的収納に甘んじた。

私にインスピレーションをもたらした26日の体験も不在の加藤代表と相まったものだ。

両家の慶事に華を添えるという純粹原理に従い得て、ためらいも憚りもなく周囲を巻き込み得るという図式は、多様な価値観がせめぎ合う日常生活においてはほとんど成立しない。しかし、成立しづらいことをもって有り得ないと見なすのは思考の放棄なのである――。

その非日常性の創出が加藤代表のかつての日常であったことに気付くと、日頃の断片的な示唆がひと繋がりのもものとして腑に落ちていった。

また、新郎新婦の晴れ舞台を全きものに成そうとすれば、ふたりの門出を祝福せずにはおかない本能的な衝動と、前途を共に歩む来賓へ寄り添った社会的な表現という似て非なる性質の両方が求められるだろう――。これはあらゆる事業に不可欠な二大要素であり、不敏な私に

は時に矛盾とも映った加藤代表の二面性であった。

加藤代表と私の会話はいわゆる“地域の活性化”についてが大概である。

私は2005年に東京を引き払って故郷・大潟村に就農するのだが、かけがえのない出会いの果実として、2009年に「茄子地人協会（なすちじんきょうかい）」というネットワークを始動させた。同協会は出身地近隣の男鹿半島などにおいて“なまはげ”伝説が由来する「赤神神社」の整備作業などに取り組むほか、秋田市在住メンバーを主体としたプロジェクト・チーム「道草教養大学」を内部に置き、私の今の営農現場である雄和地区で「空港道路ブラッシュアップ事業」を推進している。

とりわけ加藤代表は雄和華の里エリアという観光拠点擁する秋田空港周辺区域に発展の可能性を見出しておられるようだ。関係企業も加藤代表の手腕に期待を寄せ始めている。

〈おもしろきこともなき世をおもしろく――〉

すでに五年を過ごした加藤代表との次の五年を想うに、このような借り句が相応しいであろうか。

最近健康上の悩みをこぼされる加藤代表であるが、仕事は職場以外にも山積みなのである。

ふらついて走る傾向のある私に加藤代表という補助輪は外せない。

ペダルをこげとは言いません。

いつまでも支えていてください。

「道草教養大学公式」

ウェブページ⇒yu-walk.com

マーラー「巨人」裏話

会員番号 K.10 畠山久雄

第29回国民文化祭・あきた2014の中で、10月19日（日）県民会館において「オーケストラの祭典」が開催され、青少年オーケストラに続いて一般オーケストラはマーラーの交響曲第1番「巨人」を演奏した。

演奏者を全国公募した青少年オーケストラ77名の演奏者中、地元奏者は46名、一般オーケストラ124名の演奏者中、地元奏者は21名であった。

数字を見て、「せっかく秋田で開催する国文祭なのに地元の人は何故演奏しないのか。」と疑問を持って当然である。これが「巨人」裏話たる所以である。

ここで「オーケストラの祭典」について簡単に紹介しておこう。この祭典はこれまでの国文祭で毎年継続されてきた事業で、他の県においても地元の関係者がボランティアで運営に携わっている。

では、運営ボランティアは誰でもいいのか、そうはいかないのである。クラシックの演奏会に足を運んだことがない人、楽器に関する知識が乏しい人には厳しい世界、もちろん知識のない人にもできる仕事もあり、現実には多くの方々に助けていただいた。

演奏会当日のスタッフ総数は85名、音楽に縁のない方は31名、つまり音楽関係者は54名であった。したがって、数少ない地元のオーケストラ経験者の多くが運営に携わらなくてはならない、演奏どころではないと早くから気付いていたのである。

全国公募した結果、どうしても不足するセクションが出て、そこに地元の奏者が出演したというのが真相であり、本音は全員が演奏に参加したかったのである。

ところで、国文祭は「文化の国体」とも言われている。全国から腕自慢のアマチュア芸術家が集まって、美術、舞踊、演劇、音楽などの分野で発表するから、国体との大きな違いは文化とスポーツの違い、順位を付けないことなどであろう。

では、国文祭の成果品は何であろう。秋田の知名度を上げ観光産業を活性化する、県民が普段は接することが少ない芸術に触れるチャンスであることは勿論であるが、その後も地元に残るものがなくては県税を注ぎ込んで開催した意味が半減するのではないか。

裏話的個人的な思いであるが、行政がいかに文化と疎遠であったか、国文祭がそれを知る機会となったのは間違いない。もともと地域にどのような文化関係団体があって、どういった活動をしているか、行政組織は知る由もない。それでも公民館活動団体や補助金を出している団体は把握している。つまり、補助金を得ていない、公民館も利用していない団体を行政は把握していない。

一方、文化関係者も、行政がいかに文化に無関心であったか知る機会ともなった。国文祭ではそういった団体と行政の共同作業が必要となったのである。この関係を一過性のこととしないで関わりを持ち続けることが、文化の浸透のために必要なことと思う。国文祭の成果に甘んずることなく、お互いのメリットを見つける努力も必要であろう。これを国文祭の「裏の成果品」としたいものである。

「オーストリアン・ハウス（神戸）」を訪問

会員番号 K.306 北 條 晃

この10月初旬、家内共々関西方面を主体に旅をした。私の傘寿記念でもあった。

まず初日は、六甲アイランドの神戸市立小磯記念美術館。女性をモチーフに独特の世界を描き続けた「小磯良平」は神戸を代表する洋画家で、遺族が市に寄贈した油彩、デッサン等、約2000点を収蔵している。

この日は、絵画鑑賞の合間に、「室内合奏団ザ・ストリングス」のロビーコンサートもあった。ヴィヴァルディのヴァイオリン協奏曲第5番から8番までの演奏。残念ながらモーツァルトの曲目はなし。

さらにJR灘駅下車の兵庫県立美術館にも足を運んだ。ディナーは神戸在住の学友K君と三宮でドッキング。神戸ステーキと灘の銘酒で舌鼓を打った。

さて、2日目はお目当てのオーストリアン・ハウス。三宮駅からフラワーロードを北に上ると、20分程で北野異人館だ。外国人居留地時代の面影を残す異人館が60棟ほど連なる。

国の重要文化財、「風見鶏の館」や、「萌黄の館」など公開されているのは約20軒あるらしいが、他には目もくれず、目指す「オーストリアン・ハウス」へ直行。こぢんまりした2階建の洋館、古いパンフレットには「ウィーン・オーストリアの家」とある。

このハウスは、在西日本オーストリア通商代表部が後援、18世紀代のオーストリアの文化と生活模様をモーツァルトの生家にして紹介している。モーツァルトゆかりの品々を当時形態のままに展示し、彼の「誕生の部屋」や数々の名作を生んだ「創作の部屋」など、そっくり再現していた。

8年前に私が訪れたウィーンの「モーツァル

トハウス」の趣とは、多少異なるが、その雰囲気再び味わうことが出来た。

ここには、モーツァルトが愛用したピアノの複製があった。これは、オリジナルピアノ製作者として世界的に有名な堀栄蔵氏に特別に依頼してモーツァルト時代のフォルテピアノ、J・A・シュタインを再現したという逸品とのこと。

その形が鳥が羽根（フリーユゲル）を広げた姿と似ているので、ハンマーフリーユゲルと呼ばれたこのピアノと出会って、モーツァルトの音楽は、確かに変わったという。

モーツァルトが考案したといわれている演奏者の指を美しく見えるように白鍵と黒鍵を逆にしためずらしいフォルテ・ピアノである。

またハプスブルグ家の女帝マリア・テレジアの肖像画やロココ調（18世紀中頃、フランスで流行した美術・装飾様式）の衣裳など、宮廷文化の様式も展示されていた。売店には私がウィーンのおペラ座で求めた小さなヴァイオリンの形をしたマグネットと同じものがあった。家内はインペリアルトルテ（洋菓子の一種）を購入。庭ではオーストリアワインを飲むことができるが、ここは素通り。

（以下、京都等の旅行記はパス）



モーツァルト自筆の楽譜もある「創作の部屋」で

話は飛躍するが本年は、1914年6月28日、オーストリア・ハンガリー帝国の皇太子夫妻が、現在のボスニア・ヘルツェゴビナの首都でセルビア系青年により暗殺され、第1次世界大戦（日本も参戦）勃発の引き金となった「サラエボ事件」から丁度100年を迎えた。

因みにモーツァルトが1791年に没してから、この大戦は123年後になる。6歳のモーツァルトが女帝マリア・テレジアの前で初の演奏を行ったとされるが、ハプスブルグ王朝は、第1次世界大戦（4年半に及んだ）後の1918年、およそ650年に渡る支配に幕を閉じたのである。



生活その総てを知っている「モーツァルトの部屋」

酒とモツの日々（33）

会員番号 K.488 佐藤 滋

国民文化祭も無事終了しました。今頃は事業の検証評価が行われていることでしょう。行政機関では、文化政策の評価は経済効果、にぎわい創設の度合いで評価されます。自治体主催の催し物は、鑑賞者の感動の深さよりも入場者の数値こそが大切なのです。数字こそが客観的なデータですし、血税を使っている以上、仕方のないことです。

文化を誇ることで、どれだけ地域住民が誇りを持ち、経済的にも潤い、他との差別化を図ることが出来るか。それは規模の大小を問わず、古今東西の政治家が試みてきたことでした。

昨年「モーツァルトとナチス」という本が出版されました。（E. リーヴァー著／白水社）四千円もするので、県立図書館で借りたのですが。（こんな高価な本がタダで読める、というのは文化行政の恩恵です。良本ですので皆様もご利用ください。）

この本では文化を政治利用しようとして失敗した一例が研究されています。例えば、オーストリア併合によって、ザルツブルグ生まれの作曲家モーツァルトはドイツの宝として世界に

宣伝されたのですが、オペラの脚本作家がダ・ポンテというユダヤ人なので、どうにも都合が悪い。姑息な手を使って細工をするのですが、結果的にザルツブルグ音楽祭の観客動員数が激減して経済的にも打撃を被ったという次第。さすがのゲッペルス大臣も匙を投げた等々……。

一昔前、行政の文化化という言葉がもてはやされましたが、結果的には各地に文化施設が乱造され、今はそのランニングコストの重圧に苦しんでいます。ソフトを担える人材を育てることなく箱物の建設で事足りるとした上意下達の結果でしょう。音楽ホール他に、郷土出身の文化人を讃える美術館、記念館、郷土館などもたくさん建設されました。差別化の象徴とも言えます。某県にも立派な文学館が出来ましたが、その県出身の大作家を大々的に顕彰することが未だにできません。（だいたい前に企画展をしたのみ）それは彼が著書で散々故郷の県民性を罵倒しているからで、なかなか行政が文化に関わるというのは難しいようです。

では文化の担い手は誰なのでしょう。徳富蘆花という作家が、「私にはいつまで見えても

見飽きないものが二つある。それは田舎の風景と子どもの顔だ。」と語っています。私は、「田舎の風景」とは、歴史が残してきたもの、「子どもの顔」とは、未来を託すもの、と解釈しています。その「歴史」と「未来」を見守り慈しんでゆくのが文化だと思います。過去に生まれた様々な作品、自然、伝統、思想それらを今の時代の人々と味わい、楽しみ、共感すること。そして、明日に、次世代に、未来にむかって伝え、教え、創造してゆくことが文化なのです。文化人である徳富蘆花は「田舎の風景」「子どもの顔」という、わかりやすい事例で、文化の担い手は、実は庶民であるということを訴えているのだと思います。

芸術家や俳優や作家だけが文化の担い手ではありません。政治家や施設だけが文化のリーダーではありません。田舎の美しさを守ろうとゴミを拾う人、子どもの笑顔を見守る人、そしてお酒を飲みながら音楽を楽しんでいる人・・・みんな、みんな文化の担い手なのです。そこに政治家はいません。国民文化祭は終わっ

ても、国民の文化は今日もこの会場（モーツァルト広場）で花開いているのです。



2014年10月から11月にかけて、「フランクフルト国際日本人学校」創立30周年記念祝賀に招かれてのピアノ演奏。

事務局より

畠山さん、佐藤滋先生の文章にもありましたが、国民文化祭あきた・2014が行われましたね。僕は11月2日のオルガンの祭典のスタッフとしてお手伝いをさせていただきました。「吹奏楽の祭典」、「オーケストラの祭典」、「邦楽の祭典」について知人がスタッフを務めていたことからいろいろな苦労話を聞いておりました。

ただ裏側のスタッフではなく、純粋に見る側、聴く側としてこれらの『祭典』に関わっ

てみると新しい発見がたくさんあり、文化の素晴らしさ、音楽の素晴らしさ、深さ、幅の広さを改めて感じた次第です。国文祭がこのような素晴らしい事業であるとは正直わかりませんでした。純粋に楽しむことができました。

来年は鹿児島で行われるようです。秋田から距離はありますが、機会がありましたら是非来年も国文祭を体験していただきたいなと思っております。 <会員番号K575>

モーツァルト広場ではいつでも会員を募っております(H26年12月現在101名) [モーツァルト広場](#)

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000 (諸会費、別途)

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058
又は 本田(事務局) 080(1673)8322